

第5章 ガイドブック 「病気の子どもの支援ガイド」 (試案) の作成

I ガイドブック (試案) の目的と意義

II ガイドブック (試案) の構成と活用
の仕方

ガイドブック「病気の子どもの支援ガイド」(試案)は、本研究成果報告書巻末に掲載する(資料1)。

また、ガイドブック(試案)では、「慢性疾患」という用語ではなく、より一般的な「病気」という用語を使用した。そのため、本章では、主に「病気」という用語を使用している。

I ガイドブック（試案）の目的と意義

1. ガイドブック（試案）の目的

本研究では、小・中学校等に在籍している慢性疾患のある児童生徒への合理的配慮の検討・提供に資する基礎資料として、ガイドブック「病気の子どもの支援ガイド」（試案）を作成した。作成に当たっては、研究代表者及び研究分担者の計3名で検討を重ねるとともに、研究協力機関との研究協議会で収集した意見を基に修正を行った。

本ガイドブック（試案）は、小・中学校等において、病気を理由に長期欠席している児童生徒への教育的支援が課題となっている現状を踏まえ、特別支援学校（病弱）のみならず、小・中学校、高等学校等の教員が病気の児童生徒の教育的ニーズについての理解を深め、ニーズに応じた支援・配慮を行えるよう、必要な情報を具体的に分かりやすく提供することを目的としている。この目的を達成するためには、まずは多くの教員に読んでもらう必要があり、分厚い解説書ではなく、コンパクトにまとめた冊子にすることを目指した。そのため、掲載する情報は必要最低限の内容とし、詳しい情報を得たい人のために情報ソースを掲載したり、関連資料を紹介したりすることとした。

2. ガイドブック（試案）の意義

第2章のⅡで述べたように、小・中学校等の教員と特別支援学校（病弱）の教員とでは病気の児童生徒の教育的ニーズの捉え方に違いがあると考えられる。小・中学校等の教員は、病気の児童生徒が健常の児童生徒と一緒に学校生活を送る上で必要な病気それ自体への配慮に主に着目している一方で、特別支援学校（病弱）の教員は、児童生徒の病気に応じて支援・配慮を行うことを前提として、2次的に生じている多様なニーズに主に着目していた。したがって、本ガイドブック（試案）を作成することで、特別支援学校（病弱）の教員が日常的に何気なく実践していると思われる内容について「見える化」し、小・中学校等の教員にその情報や知識を提供することで、学校種による教育的ニーズの捉え方の相違を補完することができると考えた。加えて、特別支援学校（病弱）や病弱・身体虚弱特別支援学級の教員間で普段の実践や児童生徒との関わり方等を振り返ったり、病弱教育の経験の少ない教員の研修を行ったりする際に、必要な情報を共有するツールとしても活用できると考えられる。

また、小児の主な慢性疾患に関する情報を網羅した資料を教員向けに作成することは、その種類の多さから現実的には難しいため、病弱教育の対象として代表的な疾病に関する知見とともに、本研究で検討した慢性疾患に共通する内容に関する知見の双方を理解しておくことが重要である。前者は、小児慢性疾患のある児童生徒への支援に関する解説書や全国特別支援学校病弱教育校長会が作成した病弱教育支援冊子「病気の子どもの理解のために」で必要な情報が得られることから、本ガイドブック（試案）は後者に重きを置いている。教育的ニーズという視点から、病気の児童生徒に共通する内容について情報提供できるという点においても、本ガイドブック（試案）の意義があると考えられる。

Ⅱ ガイドブック（試案）の構成と活用の仕方

1. ガイドブック（試案）の構成

ガイドブック（試案）は、「病弱教育に関する基礎的・基本的な内容」、「病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮に関する内容」、「合理的配慮に関する内容」という3つの要素で構成されている。以下にガイドブック（試案）の目次を示す。

－教職員向けガイドブック－
病気の子どもの支援ガイド（試案）

- I. はじめに
- II. 病弱教育の基礎・基本
- III. 病気の理解
- IV. 病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮
- V. 合理的配慮の観点・項目から

文献

- 資料1. 病気の子どもの事例検討シート（教育的ニーズ、支援・配慮）
- 資料2. 文部科学省通知（病気療養児に対する教育の充実について（通知））
- 資料3. 病弱教育の対象となる代表的な病気（「教育支援資料」より）
- 資料4. 合理的配慮の観点・項目別 「病弱」の子どもへの配慮例（中央教育審議会初等中等教育分科会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」より）
- 資料5. 学校生活管理指導表（日本学校保健会）

「I. はじめに」では、ガイドブック（試案）の目的や活用の仕方を示した。

「II. 病弱教育の基礎・基本」と「III. 病気の理解」では、「特別支援教育の基礎・基本 新訂版 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築」（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，2015）を引用しながら、病弱教育の概要をまとめた。また、「III. 病気の理解」では、主に関連の書籍や資料を紹介した。

「IV. 病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮」では、本研究で明らかにした慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズのサブカテゴリー毎に支援・配慮のポイントを解説するとともに、具体的な支援・配慮例を示した（第2章のIIや第3章のIの内容を反映）。また、小・中学校等の教員がイメージしやすいように、研究協力機関の特別支援学校（病弱）が執筆した指導・支援のエピソードも掲載した。本項目の構成のイメージを図5-2-1に示した。

「V. 合理的配慮の観点・項目から」では、学校における合理的配慮やそれを支える基礎的環境整備の考え方について概説するとともに、合理的配慮の観点・項目毎に検討時に確認する必要

がある事項について示した（第3章のⅡの内容を反映）。

—学習面に関すること—

2 前籍校
「今、どんな勉強をしているのかな」「私のこと、覚えてるのかな」

キーワード：前籍校との連携、前籍校の友達とのつながり、復学後のケア

入院中、病院にある学校・学級で学習している子どもにとって、大きな励みになるのは前籍校（地元の学校）とのつながりです。復学（前籍校に再び転籍すること）の過程で生じやすい問題点として、入院中の子どもと前籍校とのつながりが維持されなくなることや、復学に際しての子ども・保護者の不安や必要な配慮事項について前籍校から理解が得られにくいことなどが挙げられます。そのため、病気の子どもにとって、心の支えである前籍校とのつながりを維持していくことが重要です。その際、病院にある学校・学級の教員からの一方の働きかけではなく、「週の子定表や学級通信等を交換し、学校生活の情報を相互に共有する。」など、双方の働きかけを基本とした連携が必要です。入院期間の短期化により退院後も引き続き医療や生活規制が必要な子どもが増えていることから、入院中だけでなく、退院後も学校間の連携が重要であり、切れ目なく支援できるような体制づくりが望まれます。

また、テレビ会議システム等を活用した前籍校との交流及び共同学習は、友達とのつながりを維持する上でも有効です。

■支援・配慮の視点と具体例

各校の担任間の連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 週の子定表や学級通信等を交換し、学校生活の情報を相互に共有する。 ● 学習進度や使用する教材を確認する。
交流活動の実施	<ul style="list-style-type: none"> ● ICTを活用した交流及び共同学習を計画的に実施する。 ● お見舞いやビデオレター、手紙のやりとり等をとおして、前籍校の友達とのつながりを維持する。
病院にある学校・学級	
前籍校との連携	<ul style="list-style-type: none"> ● 転入・転出時のカンファレンスに前籍校の担任も参加できるようにする。 ● 前籍校に復学した後も必要な配慮等に関する情報を提供する。（特別支援学校高等部の場合）前籍校と連携し、相互に単位の読み替えを行う。

エピソード②：小学6年 Bさん

白血病の治療のため、長期入院をしていたBさんは、退院が近づくと前籍校へ戻ることに不安を感じていました。「友達が自分のことを覚えてくれるだろうか」「自分の机が残っているだろうか」「学習が遅れていないだろうか」「今の自分の容姿のことでかわられないだろうか」等々。そこで、特別支援学校（病弱）の担任が前籍校の学年主任、担任と連携してBさんに前籍校の様子を一つ一つ伝えるとともに、心理的な安定を目指す自立活動の授業（創作活動、クラスメイトとのボードゲーム、個人的な話を聞く等）の工夫を行いました。また、前籍校の学習進度を把握して教科担当とも連携した。容姿や病入の配慮については、前籍校の協力が不可欠なため、初めに特別支援学校（病弱）と主治医が支援会議に向けての事前会議を行い、次に本校と主治医と保護者との会議を経てから、本校、前籍校、主治医、保護者で、病状や容姿についての配慮事項を話し合い共通理解しました。Bさんは安心して転出し、前籍校に順調に登校を始めました。

**教育的ニーズのサブカテゴリ
（研究成果報告書の第2章Ⅱより）**

**ニーズ、支援・配慮のポイント解説
（研究成果報告書の第3章Ⅰより）**

**支援・配慮の視点と具体例
（研究成果報告書の第2章Ⅱより）**

**教育的ニーズに関連するエピソード
（研究成果報告書の第3章Ⅰより）**

図 5-2-1 「Ⅳ. 病気の子どもの教育的ニーズと支援・配慮」の構成イメージ

2. ガイドブック（試案）の活用の仕方

ガイドブック（試案）は、病気の児童生徒への指導・支援方法について詳細に記述したマニュアル本ではなく、必要な情報をコンパクトにまとめ、個々の教育的ニーズや支援・配慮（合理的配慮を含む）についての検討をサポートするツールである。例えば、ケース会議等で病気の児童生徒の実態把握を行う際に、特定の内容に偏った話し合いとならないよう、関係者間で共有する参考資料として活用することが考えられる。同様の目的で、入院中の児童生徒が復学する際の支援連携会議等で、特別支援学校（病弱）等の教員と前籍校の教員とで復学後の支援・配慮を検討する際の参考資料として活用することも考えられる。

また、本ガイドブック（試案）は、経験の少ない教員が病弱教育の基礎的・基本的な内容を理解するための研修テキストや、研修意欲の高い教員がより詳しい情報を得るための手引きとしての活用を想定している。例えば、教育センターにおける病弱教育の基礎研修のテキストとして活用したり、学校の状況に応じて校内研修のテキストとして活用したりすることが考えられる。

- 99 -

<文献>

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2015）. 特別支援教育の基礎・基本 新訂版 共生
社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築. ジアース教育新社.

全国特別支援学校病弱教育校長会. 病気の児童生徒への特別支援教育 病気の子どもの理解のため
に.

<http://www.nise.go.jp/portal/elearn/shiryou/byoujyaku/supportbooklet.html>

(アクセス日、2015-12-24)